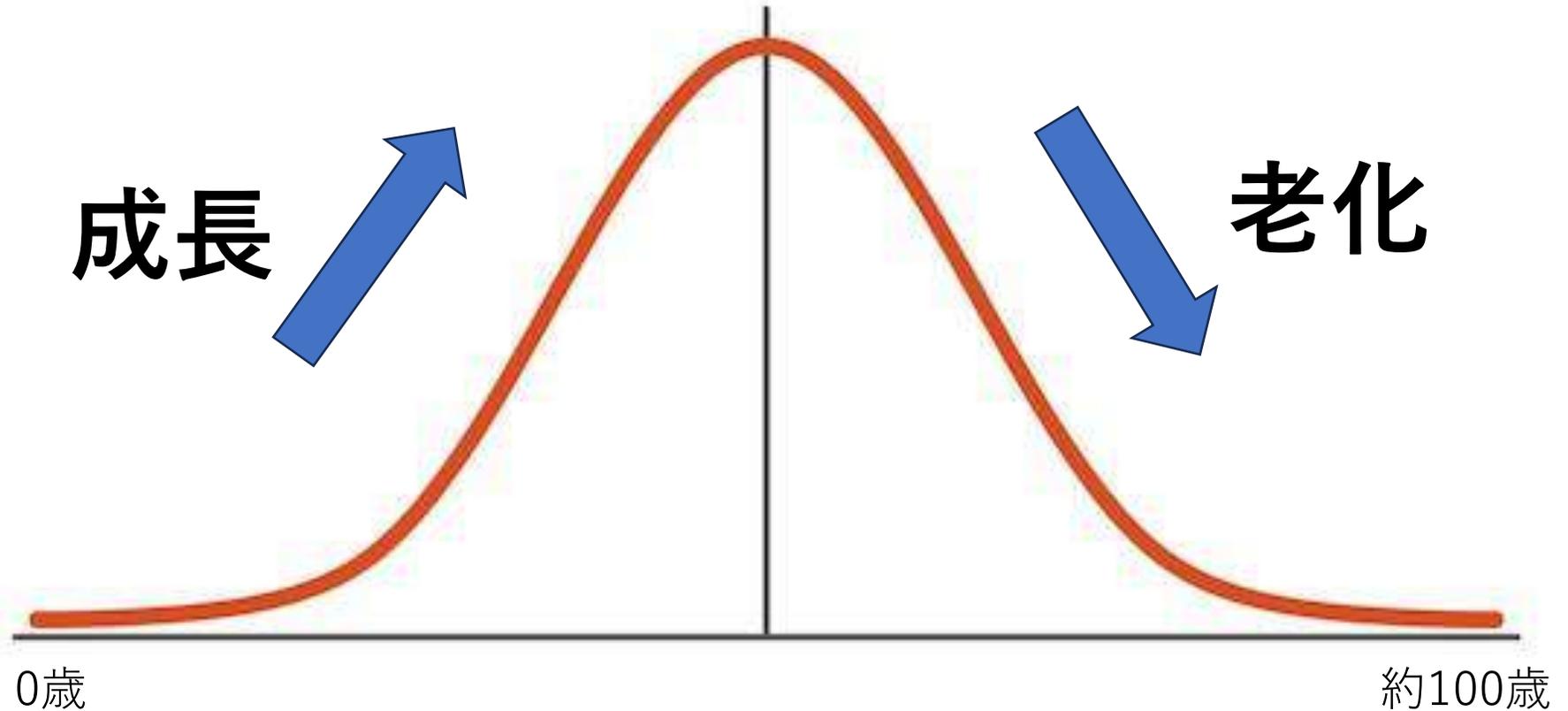


「ケアする人」をケアする ことも、とても重要

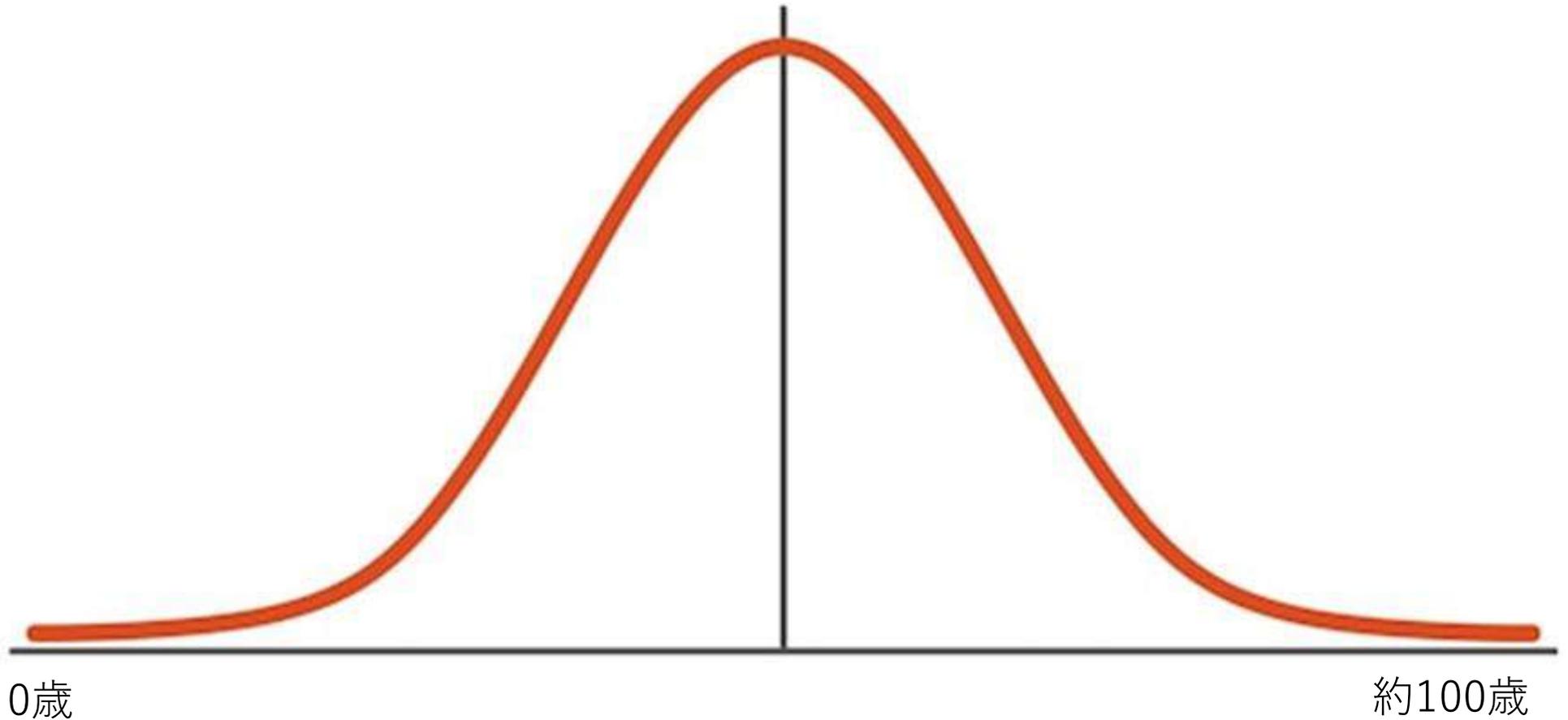
この社会的ネットワークの

■地域拠点が「地域包括支援センター」

■地域におけるキーパーソンが
「介護予防サポーター」



※本来、人の一生はこれほど単純な図式で表せませんが、
今日はあえて簡単にしています



「老いていく」のは、「生まれたころの
赤ちゃんへと戻っていく」過程である

自分の赤ちゃんに接する
ように、お年寄りに接する

赤ちゃんのように
大事にする

≠

赤ちゃん扱いする

私（小川）の身内の例

父親 昭和6年生まれ

令和5年6月24日 誤嚥性肺炎で没

91歳

亡くなるまでの大まかな過程

- 令和3年12月
自宅で動けなくなりショートステイ利用開始
- 令和4年2月
隣接するグループホームへ入居
- 令和5年2月
誤嚥性肺炎（1回目）発症
病院へ救急搬送、入院
3月に退院し、グループホームへ戻る

■ 令和5年3月

退院直後 グループホームにて
家族、施設スタッフさん、主治医の先生
で話し合い

家族の希望「今後また具合が悪くなったら
無理に検査や治療をせず、可能ならばこの
ホームで、自然なかたちで看取ってほしい」

希望を聞いてくださり、ホームでの生活が
再開

■令和5年5月

誤嚥性肺炎再発

38～39度台の発熱、息苦しさなどの症状

「看取ってほしい」とお願いしていたものの
ホームでは治療が出来ず、苦しい症状を我慢
させるのはかわいそうなので、主治医、ホーム
スタッフと相談して、再度入院

肺炎に対してステロイド投与、続いて抗生物質
の点滴で治療

■ 令和5年6月

ステロイド投与は高い効果をしめしたが、
投与を辞めたら高熱が再発し、抗生物質を
継続

入院以来絶飲絶食

入院して約2週間経ったところで、病院の
主治医と面談（6月13日）

これ以上抗生物質を続けても効果は見込めず
点滴による水分補給も浮腫（むくみ）が強くな
って本人も苦痛

主治医との相談により抗生物質投与は中止
点滴も半分に減量（500cc/日）

■ 令和5年6月

6月21日に見舞ったところ、点滴の量を減らしてもらったにもかかわらず浮腫が増悪
本人は言葉にならない声で必死に何かを訴えてくる

その様子から、点滴を含めたすべての治療の中止を主治医にお願いし、その通りにしていただく

3日後の6月24日午前0時20分、眠るように逝去

唯一の正解は無いかもしれないが、
超高齢の終末期に、本人が嫌がる
ことを我慢させるのはお互いに
つらいものがある

「何が本人にとって少しでも機嫌の
良いことなのか」
本人が話せなくなっていたら、家族
や周囲がそれを汲み取ってあげたい

誰もが「機嫌よく暮らせる」社会
の実現に向けて、皆さんのお力を
貸していただけましたら幸いです。